

第6回 国際協力セミナー 報告

松原望先生が語る、哲学と人間像、研究者としての人生

講師：松原望先生 東京大学名誉教授、上智大学外国語学部（国際関係論副専攻）教授

日時：2006年12月26日 16:00-18:20

参加者：16名



ご報告：

1. 松原先生の経歴—イントロダクションに代えて

(1) 経歴

- ・ 空襲の経験
- ・ 林周二先生との出会い
 - 『研究者という職業』における研修者の心得8か条
 - * <http://www.qmss.jp/author/biography/hayashi.htm>
 - 4：世に役立つこと⇒本当の意味で世に役立てることは難しい。何が世の中で問題になっているかも定かではない。
 - 7、8：他部門との積極交流の勧めと視野拡充のための研究環境の転換⇒新領域を作るときに思っていたこと。
- ・ 統計数理研究所
 - 社会を捉える上で、統計と数理だけに頼る限界性を認識しつつ…

- ・ スタンフォード大への留学
- ・ 筑波大学、東京大学
 - －社会科学的分析を数理でやるといっても…社会や人についてどう捉えたらよいのか。哲学への関心。
- ・ 嵐の時代（新領域創成科学研究科設立時における闘い）

（２）今振り返って思うこと

- ・ 研究者としての人生：

数理⇒社会科学⇒（権力闘争を経た後の生々しい）

社会科学⇒哲学

- ・ 人のために役立つことが重要、とばかり考えていると非常に研究は堕落したものとなる。結果として、そうであることを望むべき。目的が役立つことであってはならない。
- ・ 数理を貫く考え方≠社会で貫かれている考え方⇒哲学について考える必要性。
- ・ 哲学について考えることとは？⇒「入れ物」は人を魅了する。「入れ物」としての国家や建物、物などについての議論は多いが、そこに入る人について考えることは軽視されてきた。人について考えてきた哲学における人間像について考える。像は「継承」と「反動」によって移り変わる。人と社会、国家に対する考え方も移り変わる。



2. 学問の心構えについて

（１）学問の三分類

- ・ 理論としての学問（テオリア）：ものごとの起こり方、因果関係の解明。アリストテレス以来のギリシャ哲学における学問体系。
- ・ 実践としての学問（プラクシス）：役に立つための学問。良き社会とは何か。そもそも良い、悪いとは何か。価値観を含む問題としての実践的学問。
 - ⇨養老先生ら：何かのための学問（〇〇の役に立つ学問）は存在しない。テオリアの立場。
 - ⇨松原先生：テオリアは学問の一側面。重視すべきだが、それだけに固執する理由はなく、実践としての学問も重要。
- ・ 制作としての学問（ポイエーシス）：形を作る。美を創る。アリストテレスやプラトン曰く詩学はポイエーシス。

⇒では、理論と実践はどちらが先か。

－実践としての看護学：個別が最初。理論はいらないと言われかねない。

－理論：universal に成立するもの。

→目指す方向性の違いであり、一概に言うことができない。

⇒聴講者へのサジェスチョン

ー博士論は理論的なことをしっかりとやるべき。実践から入ると、自身の主観、思いを書き付けたものになりかねない。一般化した方が学問的会話にとって重要。

(2) 批判とは何か

- ・ critic と kerkik の違い。
 - ー後者の批判は、悪口ではない。後者の批判とは、「…良い悪い部分を無私に評価すること」。通常一般に言われている批判とは違う。
 - ー批判とは実に難しいこと。「…「批判」とは高度な知的作業…」。
 - 例) なんとなく環境に悪いから、開発は悪い。ではなく、環境を守ること、開発をすることの意味をしっかりと理論的にやらねばならない。→しっかりとした「批判」ができれば、それで十分に修士論文になり得る。
- ・ 二つの批判
 - ー内在的批判：上手い批判は相手の立場に立つこと。A→Bではなく、AがBの立場に立ち、Bの自己矛盾を引き出すことが内在的批判。
 - ー外在的批判：見解や認識の違いに関するもの。
 - Cf. 相手の立場に立ち相手の自己矛盾を引き出す批判の方（内在的批判）は外在的批判より強力なものに。

(3) 演繹と帰納

- ・ 演繹：理論的なもの。典型例としての三段論法。三段論法に拠れば、観察しなくとも推論しうる。例) 死を確認しなくても、人が死ぬことは頭の中でわかる。ギリシャ時代には演繹しかなかった。
- ・ 帰納：フィールドサイエンス。現場重視。ただし、現場から一般を引き出すことは非常に難しい作業。
 - ー佐藤先生：統計はいいですね。集めてきたデータは全体を現すもの。我々のように個別をじっくり調べることの意味とは？
 - ー帰納がなぜ妥当か、についての議論は実はあまりない。
 - ー例) すべてのアリは黒いといえるか。
 - 議論の飛躍は普通禁じられているが、論理の飛躍を許すことにより帰納の妥当性が確保され得る。1000匹のアリからすべてのアリへ。

(4) 相対化という作業の重要性

- ・ 自己の主張や立場を客観的に見ること。
 - ー例) 私は本当にそう考えて良いのだろうか。特に実践に携わる人こそ相対化が必要。

* 以上、<http://www.qmss.jp/inter/ss/01/materials/cois/default.htm> を参考にしながら。

3. 哲学—学問的議論の背景にあるもの

(1) ギリシャ哲学

・ ソクラテス＝聖人→プラトン＝哲学者→アリストテレス＝万学の祖。

ーソクラテスが毒杯で死ぬ。その場にいた弟子のプラトンは、人が何かのために死ぬということがあって本当にいいのか、と悩む。尊敬していた師の死を前に、プラトンは大きなショック。その後のプラトンの著書はすべて、ソクラテスは…で書き始めている。

ープラトンの愛（プラトニックラブ）：美しいものは消滅するが、美そのものは消滅しない。モナリザを見て美しいと思う。モナリザにおける「美」は約 500 年前から「美」として我々に伝わる。プラトンは「…美そのものと、美しい個々のものを区別…」して考えた。

ープラトンのアイデア説

ー三角形の内角の和はなぜ 180 度と知っているか。それを真であると知るにはどうすれば良いか。（実際に三角形を作り、内角をつなぎ合わせるという実験を行いながら）

→すべての三角形について実験できているわけじゃないので、実験に利用した個別の三角形のみの内角の和が 180 度であるだけを我々は知った。しかし、すべての三角形を調べなくてはいけない。永遠に続く作業に。

→そもそも「三角形」というものは？と考えるべき。

⇒個々の三角形を離れた「三角形」なるものを考えなければ、内角の和は 180 度であるといえない。

→三角形のアイデア：明治時代「アイデア」を「理想」と訳す。

⇒ものごとの形態や現象の背後にある本質（アイデア）を考える重要性。

ーアリストテレス：「本質」という言葉を使いだす。プラトンのアイデアで考えた場合、現実にあるものはすべて醜いものか？そうではない。ラファエロの絵画（アカデメイア）でプラトンは上を指し、アリストテレスは下を指す。

(2) 人とは何か。

・ プラトン：人は何かのために死ぬ、そんなことがあってよいのか。

ー人は大抵のことは知っている。でも、一番知らないのは人についてであり、自分自身について。

ー人は自然や、食べ物についてこれまで考えてきた。しかし人間について考えることはしてこなかった。ソクラテス以前＝対象としての自然現象、ソクラテス以後＝対象としての人間へ。

ーアカデメイアにたてかけられている標語は「自分を知れ」。

⇒人についてギリシャ的に考えることとは、イデア的、本質的に人間について考えるということ。

・ソフィーの世界に登場する哲学者らの人間観

ーソクラテス：もっともかしこい人は、自分が知らないということを知っている人だ。

ープラトン：魂の本当の住まいへのあこがれ。あこがれはエロスと訳される。肉体だけでなく、知識などもあこがれの対象。

ー…省略しまして、

ーデカルト：工事現場から古い資材をすっかりどけようとした人。生得観念：人間は生まれながらにして筋道を立てて考えることができる。

ーロック：先生が来る前の黒板のようにまっさら。デカルトとの対比で、経験主義。人間が生まれたときは白紙（tabula rasa）のようなもので、経験によって人は知識を有していく。

⇒Cf. プラトン、ソクラテスの時代においては経験は虚妄なもの。今では逆に経験が重視されてきた。

ーロマン主義の時代へ。啓蒙主義への反動としてのロマン主義。例）安倍さん『美しい国』。政治の本質や政策の厳密な評価ではなく。ロマン主義は19世紀中ごろまでの一つの政治主義。

ーキルケゴール、サルトル、ハイデガーら：実存主義の時代。20世紀において戦争の問題や環境、貧困の問題に直面し、人間に対する価値が揺らいだ。「私って何だったんでしょうか。」⇒このとき、私の前にあるものを実在と呼ぶ。実在は存在に先立つ。では、実在を考える基準とは？

→キルケゴール：キリスト教

→サルトル：キリスト教以外の政治的活動。あなたらしいあなたのための政治活動。

* 以上、 <http://www.qmss.jp/intercss/01/default.htm>
<http://www.qmss.jp/intercss/01/materials/idea.htm>
および、ソフィーの世界の目次を参考にしながら。

（3）ホッブスにおける人間

・内戦（civil war）をどうするかがホッブスの最大の問題。

・ ホッブスの世界観

- ー人間に対する徹底的な観察。人間に対する性悪説（人々を信頼しない人間）。
- ー人間の自然状態における闘争状態に終止符を打つべく、リバイアサンの設立（コモンウェルス：今で言う国家）。

* 以上、ホッブス『リバイアサン』第一章を引用しながら。

参加者の感想から：

- ・ 非常に興味深く拝聴しました。ありがとうございました。「学問論」の講義は、学問とは何か、何をおさえるべきなのか、それはなぜか、というように、流れるような説明の中で、クリアに受け止めることができました。物事の本質を捉えることに、何の意味があるのか。哲学の歴史からそのヒントが見つむぎだせることを、先生のわかりやすい説明で少し判ったような気がします。哲学は、理想（理論）と実践をつなぐもの（つなぎ方？）を考えることなのかと思います。【M2】
- ・ Academia の壁には「Know yourself」たしかラテン語で「ノン シビ」と書いてあったはずである。私はこの言葉を高校生のときに知った。以降月日経ったが、未だに「自分」とは？まだ未知数でもあり、既知の範囲も解るようになった。これは研究に対する姿勢を語る上で同じようなことが言える。すべてを知っていたら研究とは呼べなくなり、またすべて解らなくても学問として成り立たない。【M1】
- ・ これまで個別の事例を重視するあまり、アイデアというものを意識していませんでしたが、アイデアという本質が物事にはあり、事例はその一形態なのだということを、今日の講演を聴き、意識するに至りました。【M1】
- ・ プラトンやアリストテレスを詳しくないので、興味をもてました。2 時間半の間に様々な話が聞けてよかったです。【D1】
- ・ 自分の専門だけをつきつめるだけでなく、教養を持つことの大切さを再認識しました。学問をする上で、深く考えることのできる人間になるようがんばります。【M2】
- ・ フィールドサイエンスの帰納法について、もう少し考えたいなと思いました。【D1】

議事録担当：西舘崇（D3）